



日本水滸傳 零本

柳田文庫
文庫11
A1098



第11
A 1098

日本水滸傳 卷之三十一、三卷

余之ヲ吉洋寺藤井書店ニ得タリ、時ニ昭和
四十二年四月二十四日也。帰来コシテ讀ムニ三十一卷
テ満尾トナモノ、如ク中間欠クト雖モソノ語ル
トコ日略ガ知ル可シ。是利將軍ノ前半關東大ニ
乱ル此ノ時足利成氏ノ孫義連^{大郎}トナモノ長尾城
ノ一色小幡秋田鹿島等ノ豪傑ニ助ケテ上
野ニ起リ武州總州ニ進出シテ關東ニ霸ヲ成
サントシテ天ノ運コレニ及バズ遂ニ亡滅ニ及ブト也
語ルトゴロ一ノ史籍ヲカス事架空ニナルベント雖

柳田泉文庫

五ツノ文章古風^{×カレトコロ}如何^{トコロ}モ古軍談之遺風^{トコロ}ア
 リ墳ム者^ヲレテ端ナク一矢ヲ登セシム依テ
 手自ラ補修ヲ加ヘ一冊ニ合シテソノ生命ヲ長カ
 ラシムルモ也老耒ノ好事笑フベシ
 此ノ書ハ原稿カ字本カ不明也何レモサレテ古
 キモノニアラス文字又女性ノ手ノ如シ作時不明ナル
 如ク著作者モ不明也古クシテ明治時代迄クシテ
 ハ大正時代ヤト思ハルノシブル^アラビヤ文字ナルト
 コロモ考フベキ也
 昭和四十二年五月五日
 柳田泉識



日本水滸傳卷之二

小楠半七郎狼漢と斃して一色と義を結託

武花より上野に移る予は熊谷寺といへる寺あり
 あり天^{てん}天^{てん}十三年九月の月^{つき}へいかふるゆへにや
 花^{はな}ひらくる満枝さあから春風^{はるかぜ}二^に羽^{はね}の色をあら
 ハし色^{いろ}邑^{むら}の老若男女^{らうじやうにやうにやうにやうにやう}入^いか
 群集^{ぐんしゅう}日々^{ににち}多^{おほ}し戦^{いくさ}国^{くに}の民^{たみ}、情^{なさけ}常^{つね}は勝^{かち}員^{いん}は成^{なり}
 て駭^{おそ}も急^{いそ}の色^{いろ}ふく恭^{たか}平^{へい}都^との旅^{たび}ひも上^{かみ}ハあ
 らドとぞ兄^{あに}へぬは熊^{くま}谷^がの村^{むら}ハ人^{ひと}性^{さが}強^{かち}暴^{はげ}は長^{なが}
 場^ばの月^{つき}ハ盗^{ぬす}賊^{ぞく}つねは充^み満^{まん}す然^{しか}れども同^{どう}邑^{むら}の人^{ひと}
 子^こ害^{がい}をなすず住^{すま}傳^{でん}ハ友^{とも}の群^{ぐん}集^{しゅう}はちもかざる徳^{とく}



わくといへどもいかゞある破落僧が余会志
て禍を生るる子あらんと村中任侠の張軒二三輩
を密に招きて是を防とす元来人子頼れて退心
ふまき風俗おれば安しと請合て手下の教人を伴
ひて岩手を定て往來へ月をせり大言を吐て其
威を示す一日上州の郷士五六人其外光禰者
殺十人刀を横たてて熊谷寺はまり余詣の婦人
をあれづり士人を耻かゝむるといへども皆志
らざる顔よて是を避て一人も相付あるものなし
曲者共寺中を徘徊して枝を折り花を散りて竟
は川舟の酒店に入て酒肴を取む亭主其形相を
見て慙慙は是を納ておす信頭は果て多く肴
を好し酒肴を傾て既には去りてゆらん亭

主其價を書記して錢を乞ふ曲者共怒りて曰
輩末りて酒を呑み酔をつくすハ汝等が幸く却
て價をいひ吾輩と敵付をなすの心なるやと早
刀を取て肩を怒らす亭主お手をつきて雄兄の
は子芳記のたんハ大芝の至みな存れといへど
も酒肴を賣て一日の助氣と仕る今日の酒肴價
おければ明日より高賣をなするやハ必ず自分
飲渴は及ぶ強くハは慈愍は今日の價たよハる
べしと涙とともよ詫るといハ共一円は取合す
既に打擲は及ぶ様子あれハ彼里中の俠者共幸
の時節ぞと七八人おつと入て先刻より様子を
ぞは賣店の酒肴を飽まで食ひ其價を出さず却
て亭主を打擲せんとす誠は盜賊の族ありおの

れら其終よてかへすべまか早々酒錢を拂ひ礼
 を厚くして去るべしと目を怒らしていふよ
 彼曲者どもさい記ひありとて大に怒り何者
 ぞ酒宴の席へ案内もなく押入刺盗賊の悪言を
 捨おらずと一同立上れば四方の狭者共大に
 笑て物を取て價を出さずして他国へえらず
 は村よてハ盗賊といひそれは鬼も角も我くは
 向てまかゝるハ勝負せんとのるあるべし手狭
 あるは家よて働まも自在ならず往還へ出て心
 よく立合べしと云一門手へ出れば曲者共沈
 らく欠け出て双方立已かれすハこそ口論
 諍と参詣の貴賤右往左往ハ逃散たり時ハ熊谷
 寺の門内より二十四五歩ハ差おちまづくとも

出て声をかけ双方一ふまに口論殊にハ寺門外
 出して鬪諍よ及ぶまの外の早引分べしと
 云一邑中の狭者共たつといふて礼ををし女者
 共酒店よて無体の働見及ぶ堪か收札まじと
 罷成るといへむ彼もの趣を一々ハ寺相拂へ
 上州の者共まひかひて各酒の價ハ寺相拂へ
 ハ夏流だりや用の口論あさくハより早々歸ら
 礼控るべしと隙便よ云ければ曲者共後て互て
 酒錢の予窮て住僧のは懸り懸るべからず殊よ
 ハ口論を相止てあめくと鳴らんや出家の詞よ
 もあらざるよよつてまたがふべしおま若き士
 のおさめたる取揚得こそ一足も退くまど悪
 さげよ言るよぞ村中の者共こたへか収て飛出

るを彼士押し止めて愚人よかへす言葉おし不俛
 ぶりとか思へ共殺十人の者共一々首を刎でし
 海草ら必駈ぐべからずと股透高く取上て曲者共
 の正面へ徐々と立むかへハ膽のふとき若士手
 始まいいとま取らせくと先の大男刀引抜てお
 どり上つて切付るを彼士刀の柄は手を掛ると
 見へけるが彼曲者を袈紗衣がけは切倒すそこを
 引おと跡あるま右よりかゝるをひらりと
 をづいて一人の首水もたまらず打戻す返す太
 刀よて一人を車切よたねたをすのこる曲者驚
 天し一同は切かゝるを心得たりと蝶鳥ふんど
 の如く飛びちかへ手もとよ近寄る奴原を三人
 まで切倒すのこる者共叶り
 と取てかへし逃

行を一町の戸よ割て残らず進語お教して心静
 小刀をふき鞆よ納め立ゆり荒れと笑て立たる
 ハ勇々しかりける働あり村中の俠者共一面
 大地よひれふし古の九郎判官ハ見ぬ世のむか
 し君の今の働時人刃の業よあらず向後吾ハ
 手下とありは奉公でし太刀をドの一端もは
 指南をなるといいたすらよ希へむ彼を打笑ひ志
 の上よ何かハ疎畧よ思ふべき中よ任せ創の
 契約せん先汝等ハ寺中よ入て万一右の者共の
 徳黨押寄せんも半がたし我ハ愛まで暫く様子
 を伺ハんとて門前の石よ腰を打かくれハ何れ
 も大よ悦て門内よ入らくとするは後の方より
 声をかけは士よ物Pさくまはらくと云て立出

る武士一人のたけ六尺有余ゆふにして鬼鬘おにまげた右
 子こにかれ眼まなこの光ひかり電でん光くわうのどく大太刀おほたがひを横よこたへて
 其容かたち悪あく鬼羅刹おにせつのどく以い我がの士大おほはおどろひて
 某まへは用もちとハ災わざ所ところあるかと眼まなこを配まはりてま
 れバ彼士かのし打笑うちわらひ成ならば某まひそかみは目めは掛かり
 たし苦くるみからずをまば一いのちハ酒さけの二階にかい
 子こては物もの語がたりは及びた一いと余あはふく述のたまはるは以い我が
 の士少おほしも臆おそせずいづくありとも急いそぎるべし
 と五人ごにん打連うちづれて酒店かふの二階にかいへ上ありハ彼士かのし亭主ていしゆは
 命いのちトて酒さけ肴さかを取とりよせ扱あ某まが名なを印しるしせずハは心こころ
 も落おち着つくマシ某まハ一い色いろ太郎たろうを赤門あかかど時とき範のりと浪なみ人ひと
 あり御ご昔むかし先祖せんぞハ是こゝ利き將軍しやうぐんはつかへて所ところ領りやうの主ぬ
 たれとも時とき移うつり星ほし掬くりて斯か浪なみの身みとありぬ

あかれども事こと時の諸もろは臣おみにして才さいを立たてるの
 心こころを捨すて給たまはしは是こゝ利きの氏うぢ族ぞくは黄明わうめいの人ひとありハ命いのち
 を捨すて給たまはしは二ふた度たび家名けなを起たさんと存ぞんじ八方はつぱう周しゆ
 持もちして英士えいしと美みを結むすばんとす然しかるは今いま足下あしもとの
 働はたらきを足たる中なかに九こゝ人の業わざなあらすいかふれば
 寺てら中なかに埋うづれて田舎でんがは柄果へいこ給たまはんや事こと時とき戦せん玉たまの
 足下あしもとの術わざを以もつて名將なせうは仕つかへたバ切名せきな自みづからき
 かるべしはるるPあさんが為なは所ところへ請こゝろじたりと
 底意そこいなき物語ものがたりは以前のいぜんの士し礼れいを厚あつくま是下こゝのは
 家名けなを以もつて何なにぞ某まが名なをつまなく某まハ小梅こばい半はん
 七郎しちらう美名みなを失うすとPあして業国わざくには沈淪ちんりんしてすは能のり
 登のぼり上野じやうのの内うちに上ありて未ま一人ひとりの心こころは恐おそる、人を足たる

ず近來事國子来りて内縁よりてけ寺子偶居
 するのミ関八州と試みて其上明君は逢て驥足
 を伸んとと成下下の形相をえるは尋常はあ
 美夫不常の士あり願はくは今日より美を結む
 んとて道をともし命を以ての有所子任せんと
 深切な述ければ太郎左衛門大は悦びとも酒
 盃を傾けて年齒を問ふは小梅二才亦あれは
 色を兄と敬ひとも一つの符節を以て是より
 り他は引分るゝとも符節を以て美をむすぶ
 の人を互に知らしめんといふ一色をありとて
 二階の上より見れば庭前の縁竹尺田むかりの
 あり是宛竟と一色手を伸して上より引はけり
 る本を引ぬくごとし根もとより引上たり小梅

其怪力を賞感し是を刺長五寸幅二寸削り
 篆書を以て信儀の二字を彫る一色が彫工ハ絶
 妙よして須臾は五十枚を彫得たり小梅甚感伏
 し一二の次方を合せて中より有段よして左
 右を半づつ請取取十里を隔つれどもは符を以
 て互に音信をなすべしと又取盃をかたふけて
 碎を尽し心は別れんとする時小梅懐中より
 金取片取出して兄の容体を伺ふは極めて貧乏
 り旅途の用菓餞別子備ふといへば我を通るハ
 心友の常辞する所はあらずと心よく是を納め
 夫より酒店の亭主は錢をあたへて小梅ハ寺門
 子入一色ハ夜暮路を取て熊谷の堤よか、誰
 か知らくは士七聖の感化なるるを其くは起り

たるの行事後の章を又て知るべし
一色時範隠士の折磨を救ふて骨と成る話

秋の日西山は落て人家悉く戸を鎖し往来自稀
と太郎を糸川只一人恐る所なく大太刀を横
へ風呂敷包を背負ひつ、駭足獣のまきと如く又
鳥のふよ似たり驛をこて長堤に待し、かゝる時
七旬近き老人夫婦道路に伏て泣悲しむ事狂人
のどし一色頻り不便の情をおこし、まより
詞を和げいかたれ、老人の暮よ及て道路に悲
涙する予を束あしと懇心は尋受ければ、五人頭を
上て有がたまきは、尋かち我々五人の百は幸の娘
あり今年十九年いまた夫をむかへ、む所々より

婚姻をゆめりとも何卒ゆへある人よあたへたく
月日をおくりけるうちよ今日をからず盗賊は
奪れたり折ふしと近隣よ人なく老の力は叶
ず其跡を尋て悲しむの、旅人心底を情と玉
へと猶涙ととめ、す一色より胸は堪かねて
咄は難を救ふべし、盗賊の去りし路はいづれの
方がや夫婦おどろいては堤の洲崎まついて
四方は杜あり今ハをや半里をへだ、りつらん
殊更究竟の荒者三人あり君猛勇なりといへど
も手むかふる、あたりといふよ一色いらつて
風呂敷包を解て二人よ已たし待ていよ今の百
は娘をつれてまらくとまきり出る思ふ矢を射
が如く須臾よして十二三町馳付ければ、案のど

く一人の女を大の男三人よて引互行一色大音
 ちげて暫くと呼かくるは其声雷の如くあり
 ければ盗賊共振りかへつて互とまる習は面を
 よたせ付けて怪き奴原老人の娘をぬすみに去てい
 づくへか行くとする我亦親の繼係をえり堪
 ず其女の途は素れり早速に渡すべしと仁王達
 一誠吾々が手は降りたるものついで返りたる
 覚へあしいらざる女の腰押して其身の命を失
 ふたとよくさげは言れは一色後をえへか収て
 花かかつて一人の盗賊を軽々とさへ上ておた
 への深田へ投付れは身体泥中し沈んで脚の形
 おしついでいて一人の肩骨を握りて捻付れは首

の骨不つきと折れて打伏たり残りて一人を見
 てあれは彼女をやくも一人の盗賊を投倒して
 膝の下は引またり一色其衝をえて大に感じ其
 俣立寄りて足をあけ頭微塵は踏碎きて彼女を
 肩は引かけて馳ぬれば老人夫婦いまが路上に
 互て望ミいたりしが一色が娘を肩て立ふるを
 えておどり上りく大に悦びてさふから狂人の
 どくきりめ終り謝すべきの詞もあかりぬ一色
 娘をま人はつり謝すべきの詞もあかりぬ一色
 息女の衝盗賊を投倒せし有さま古の巴とい
 共及ばしいかある人の末あるぞと尋るは老翁
 涙を流し誠は君の大恩よて一人の娘を種生た
 る心ふれば何をか包まん益田某と尸て結城屋

子仕へ地ぬし
 入たり先こあたへと家居は伴ひ入るは金く
 貧家はあらずすべてきれいな住居せり夫婦酒
 を出し肴を調へ娘諸共救盃をすめて老翁戸
 けるは君は年より室家もあくハ幸の因縁た
 り見苦し共娘と夫婦の契約をあし暫く愛は
 滞りて仕官の路を求めるハ使おまも有ま
 じと思ひ込で言けれハ一色も流石岩不はあら
 ず行さき弟もあけれハ幸は愛よとまらむや
 と思ひけれども容顔もつハら羨し娘心吾形
 相の猛を厭ふべし去かれハ邪の縁を組で其人
 の害をあさんより辞退するは去くハあしと礼
 を厚くして老翁の懇情誠は我身は取て祝着せ

リ係し吾ハ浪々の武士武者修行は廻国を妻
 を求めるは心あし其上息女ハ若うして容をよ
 ろるわしけれハ富家友人の縁組こそ始終の幸
 あるべしと志とやかみ言けれハ娘ハ顔を打赤
 めて自富貴をなむはあらず又好男は従ふるを
 求めぬ只忠義の武士の妻とあらくる一身の疾
 あり今日思はずも君の大恩はよりて耻かしの
 を免れぬ父母の家はゆりぬ慈悲多量君は上こ
 のの夫あし行くハ父母の詞は従ふては家子
 止り玉ふべしと志操面は溢れて云けるは親
 志もよみ歡びてひたすらは勧めけれハ一色其
 時子老翁一つのたる今思ひ付たりは境の先一

里余りて就鳥塚熊太郎といふ盗賊の張本あり
 得ふ荒者五六十人及ぶといへり定めて先刻
 は身の手はかけ殺され盗賊も彼が手下ある
 べし然らば不目極て仇をなすべし早々子家
 財を運び上州へ店を移すべしと色を交しけ
 るよ一色をすて翁の詞の如くなるとき必
 吾を仇とすべし所詮其今晚彼家は立越て対面
 の上和談を申し万一承引せざる時其就鳥塚を
 打殺して近郷の禍を免れんと早刀を取て立
 出れば娘大に制して就鳥塚が武藝一國は名高く
 殊更春族多けれ君勇ありといへ共甚危一暫
 く思慮を廻らさば手殿も又多あるべしと父母
 もとも子に含められければも太郎を門合点

せずえ来我武者修行の身おれば武藝は名高き
 者ハ彼に限らず必立合て其業を試るかあらず
 初も心を芳たるとかかれと門外に立出れば
 初文よきたり例の駿足を以て境一里ばかり
 りる子盗賊と見へたる男五人右より立出
 一が一色が形相おどろきてさりげなく行を
 びるを咲あへて就鳥塚と云者の家はいづく
 同ふは申者共立とまりて我々が頭の名を呼
 尋来るはいづくの人の手下あるぞと大や同類の
 詞をかくれば一色悦んで我が上州より来る者
 あり就鳥塚を知りたる者あり内用を頼り尋る者
 リとまてしやかといへば然らば道をかへて
 ぐかり行右の方は大なる一の家あり是就鳥塚

勝たるもの子服後せんといふ流石盗賊の棟梁と
 て理非分明ふり一色ハ甚悦びて然らば早速立
 合てとも子業を励くと五人立よりて身構を驚
 塚丈余の鉄棍をつ元子突て吾年練の一棒請て
 見られんやといふ一色着へて断よ及ば何れ
 の具ありとも心よ任せて僅くべし我また後て
 驚せんといふ然鳥塚躍上つて一棒振上る風を
 生して一色がま向をうんとお懸るを一色側よ
 ある六尺余の青目の手水鉢を引き起してみづ
 まうけ然鳥塚が手元へ付入件の大石高く挑げて
 うど撃手よさるもの鉄棍を中より不つまと折る
 然鳥塚獅子の迷がこをうして三尺余の太刀電の
 どくよ引抜て切てかゝるを一色抜合せて是子

驚し一上一下透るふく打合せて半時よあま
 て然鳥塚詞を驚てまばらくの舞すでよ息切れ腕
 つかれたり気をやいふて立合やべしといふ
 子一色笑てともかくもとして引かれ有て彼大
 石よ腰かけの神色自若たり靴目く有て然鳥塚打
 太刀を拂ひ除けかいくつて髪髪つかんで
 かつパと投をへ膝よあつかと押しへて先刻よ
 リ太刀打の百よ打とむる透るまを知らせん
 健気ふるたたらま子めんして其透を知らせん
 為子汝が衣類よ手裏剣十打打たり故よ再び
 立合ふ時よ吾年練を顯ハ一斯手こめはせり
 は上ハ差つめたる勝負をすべしと引起し
 才おせハ然鳥塚起上り吾衣類を改るまた右の袖

襟胸元みぶもとにするとま手裏劍てがね九本を尋ねしたづね志こゝろす
 った平伏し君の力量りきりやう武藝ぶげい人力の及ぶ所ところあら
 ず凡武銃ぼんぶじゆう二ヶ国にヶくににたてつく者先へす
 今夜こんやに自みづか分の力の不足ふそく武藝ぶげいのいままたまた備たもとを
 かり得たり何卒なにぞ彼後あきあき討うて武藝ぶげいを励しんげむべ
 言ことは手下の救十人皆君みに従ふべしと精神せいしんを
 結むすんで共ともに危あやきを助たすぐべし以もつて同どう玉たまの人ひとを恨にくす
 べからすと然しか頃ころは契約けいやくし懐中くわうちゆうより符節ふせつの片かたを
 汲ひいて是こゝに合あはずれを指さくハ皆我黨わがとうの人ひとあり
 と云いをしへて既すでに別わかれてかへらんとする時手
 下の盜賊たうさく救十人皆獲物えくぶつくを提ひて大庭おほなまに入来
 リ一色いしきを見て一統いつとうに居並いならびて別わかれをさす是こゝに

兼かての手配てくがいあるべし一色いしきさあらぬ俵たわまで右の
 大石おおいしを軽かろくと引ひきりて大勢おほしのまへまで両手りょうてを
 以もつて是こゝを碎くだくまひとへまつちくれを崗かみすかど
 し盗人たうじん共とも驚馬怖おどろりておぼへど地ちは平伏へいふくす物ものを送おくり
 出でていくまに謝あやれし手下てがたの者共ものどもけしめ終はつを
 語り道の守護しゆごとして松明しょうめいをとほさしめくそ一
 色いしきをととめ我われ一時ひとときにまきする七八里しちぱちり必かならずしも後
 ふともつつく者ものあしきかざ一人ひとりゆかくなはと
 猶なほ後日ごにちを期まして悠々ゆうゆうとして立たち居ゐる既すでに
 来きれは益田ますだ夫婦ふうふ諸共もろとも太郎たうらうを赤門あかかどが首尾くびびいか
 と待まちいたるは五更ごげいに及およんで海うみ来きれハ大おほに悦よろこび
 て始終しじゆうの物語ものがたりを定さだめてまき其武勇ぶゆうを慕こひ遂ついには
 其夜そのよ婚いん姻いんを調しらへて智ち量りやうのふりをもむすべし

日本水滸傳卷之三

城戸次郎太郎一色と義を結んで陶山を御話

其頃同國忍の城下へ城戸次郎太郎といへる浪
人鎗術の妙を得て近所の郷士皆彼に従して是を
師とあはすや偶々居り或時赤坂の城主遠山九郎
大長侍は陶山上総といへる者鎗術に達し一
家の中師範としてお朱氏康の感快二通まで所
者ふせば高慢して天下我術は續く者おしと思
へり軍器の使あつて城下は城戸が鎗術を賞するを
の城は滞るの男城下は城戸が鎗術を賞するを
字て我は所ままりては業を以て名高き者を辨

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

面もあさずむあささ知らてゆらんか成田の存
 念もいかかりありと下総守は頼んで彼浪人と業
 を試んとす成田も好子の生れあれは物奉行
 今一々次郎太郎を召さしむけ付大長寺まで下
 野のつ士赤屋甚右衛門元来頼部者まで鎧を
 工くし上方へて其業を討つて東下下郷士
 とあり那須一族の諸侯の家士は指節して暮し
 けたるが近來忍の城下は吾有て梁束て城戸氏
 の名をすて幸は業を試んと相約して今日寺の
 庭まで出合ありと所の者寄集りて是を見る
 一色太郎丸赤門も兼て城戸が勇士ふるまを
 てともは儀をむすぶの望ありては所は東り幸
 よして任後ま知る人ありて城戸は一面の交り

をあして今日の換子を伺ふ既ま時暮り至りて
 赤屋甚右衛門鎧を以て庭へ立つ其体勇々
 一色人柄は城戸次郎ハ速鎧を核たして互
 出る大高く色白く眼の内は威有て誠は一方の
 大おとえへぬ互は神は声かけて上段下段は取
 合透るなく打合しが赤屋竟は打負三交持鎧を
 地は落せり物れど物少し恨の色はく是所
 業神通あり中々我輩の敵はあらす法あす志
 だがつて学んこそ武通の本意ありと頻り師
 志の志るま黙止しかたか後一色密は城戸は許容し
 て師赤の約を定む人志て後一色密は城戸は許容し
 みて其志存を尋るよえは是利尚氏の臣下無雙

の勇者と名をまき播磨守持季が子孫よりして
 次郎太郎持成と名乗て南時足利家の衰廢を憤
 て其成族の賢君を撰んで中興の志あり一色又
 己が心底を明しとも子悦で義を結で兄才と太
 り彼符をよみてへて猶塚を斗ふは城主成田
 より使者到來して陶山と仕合の命下れり次郎
 太郎猶豫なく領事して使者を返し吾は一色子
 語て日陶山は遠山家の家臣彼も立合て吾勝利
 を得ば必志の勝負と云ふらん由や陶山を突伏
 るとも成田又遠山の言聞きは吾を殺さん一色
 の闘争は成田を以て依り肩が斗名を承く伏せし
 れ共我は業を以て依り肩が斗名を承く伏せし
 いかせんといふ一色靴を思慮をめぐらしし

一度の工夫を案じ出して日我既は城中の案内
 を知れり仕合の場は松めて維新の場あらん其
 所子牽りて土居ありは一重外は則ち道あり
 れ共堀深くしてはる先達て堀を渡るの手段を
 ては堀を越すべしを先達て堀を渡るの手段を
 赤さんと計策内談す味戸威儀を調て城中
 に入ぬ成田下総守馬場を仕合の場と定め馬見
 所は幕を張自分近士を従へて床几は懸り左右
 は警固の歩卒を列して武頭下をを加へ教重の
 体相く下総守取次は年じては所へ次郎太郎を
 招きて對面をたす城戸態勅は懸れをちりて花
 子居る物奉行の仲人よてあく右高と通して礼

下総守も大は感じ既よ城戸が敵する子あた
 りし鎧授けて矢声たげく馬も折れて縦横よ
 目立し武者振あり上総ハ遺恨を晴さんる
 一軍ありと先馬足なて馳あやまし勢をうた
 人進退馬足ハ狩人足の如く馬ハ逸物余手ハ
 者かけ声天よ音ま馬足地を動して突ハ聞ま
 れハ廻り人ませもせ諸賊物前代未々の勝
 馬合たり成田を始め諸賊物前代未々の勝
 とかたづをのくで扱へたり次郎太郎陶山が鎧

今す誠は城戸が運命を憂ふと見へまけり其
 取圍で召捕べし遠山ハの言完まると手合を
 今す誠は城戸が運命を憂ふと見へまけり其
 取圍で召捕べし遠山ハの言完まると手合を
 今す誠は城戸が運命を憂ふと見へまけり其
 取圍で召捕べし遠山ハの言完まると手合を
 今す誠は城戸が運命を憂ふと見へまけり其
 取圍で召捕べし遠山ハの言完まると手合を

馬の程を見切鐘を牽て馬いさませ逸参り穂先
 を配子差つくれが上総是より遊易して馬引返
 して外行をあとと志たふて追かける時路ハ今
 と陶山上総忽馬を引返して一歩叫ハつて突懸
 るをひらりと外して次郎太郎指鞭うつて馬場
 末へ外に出す陶山弥勢ハ一歩引つて文字お糸
 付るを近き場所ハ引かへし陶山が鎗を打
 たらひて透さず馳入綿唾つかくでぐつとさし
 上け大地はかつと内堀を境へかけて突抜たり
 上るを鎗取直して内堀を境へかけて突抜たり
 武頭達も又てすこや陶山を突伏たり次郎太郎
 を召捕と云え十人馳來ると鞍てまを馬糸指
 て鎗もぐはらりと投棄て土居の上よかけ上り

七尺有餘の高堀よひらりと越せハ堀水たへ
 て水々たり其内は雑兵共堀の上より頭れて運
 びたる次郎太郎尋常は繩かかれと階子よ繩よ
 とひしめきたり城戸も爰ぞ今の瀬とを眺と
 又後せば大木をほしかけ中へ出ん橋あり是
 こそ一色が賜と一さんよほり橋をひかんと思
 へども大磐石のどくあれバいかせんと思ふ
 所よ本影より士一人き出て爰ハ我ままかさ
 よと右の大木半へこたり扱打み切けれバ大木
 を筋透し伐放し堀水へ落る所を後さまよ一丈
 ぶか利鳥のどくよ飛返れハ次郎太郎大木小楡
 ぶき足下ハ先いかふる人ぞと問ふ某ハ小楡
 半七郎といふて一色時靴とまを結びし兄弟

一色家も難あつて急よ立ゆり我を残りて下
 の急難を救はせん吾をむかハせりといふ是
 よりあ人諸共心存を語り合半道ハかり立退
 一は成田が武頭百人半を引具して間近く追詰
 まりしかハ半七郎伸上りよし物物の兵あし
 は刃ハそれ見物あれと太刀板かざりてむ
 らかる中へ馳入獅子奮迅の怒をさし前後を
 右は打付て人を切る獅子を薙み異ふらず即座
 子十八人切殺せバ一同みだつと逃散たり与幼
 の某馬上にて鎧を提て一文字も突かゝるを飛
 ちかへて馬の平首切付たり何かハもつてたま
 るべきを逆さまに落るるを首ちうよて打戻し
 其鎧を分捕して城戸を招きて相返せハ次印太

太郎世元と笑ひ日本一の分捕最早下ハ休息
 あれと鎧押取て馳かゝり近付く故原七人ま
 た、く弓は突伏れハ頭人も大は恐れ人殺をま
 とふて引かへす夫より五人諸共は最早城下
 思ハ止られし何事も一色方へ行夜談を極んと
 熊谷路迷いて急ぎ行早暮かゝる空ふるよ知らざる
 道は路迷いて二里斗走行ハ多く飢まつかれ殊
 断夜もして巷た右は分れたりいかにやせんと
 思ふ多は究竟の男七八人手は松火を振立て頭
 と足つて夜奴の如くふる男大太刀を換たへて
 道を急ぎて来かれハあ人少しも恐れすよ
 りて熊谷の駅へハいれ道の道と尋ねれば彼大男
 五人を透見て五人ハ城戸小楯の二勇士はあらず

やと問ふ人まよつとしてたいふ妻殿ハ何人
 ら某ハ就鳥塚能太郎とて一色時範の門人なり
 五士の遊はしあたりあふの容顔唯人ならず故は
 問ふといふ五人大に悦びて姓名を名乗竹符を
 合ていさ一所は行んと云就鳥塚竹葉を取出し
 を助しかハ奮喜して是を食し誠一色の家維
 ハいかふる予ととふ忍の郡奉行一色の内室
 子急慕して五親の老人を質は取立て一色を攻
 むる親因とふれり是よよつて夫婦怒恨また
 是二人共奉行の家は馳入て奉行を始め一家の
 数人を残さく切殺して常陸のかたへ立退たる
 此れをなす所は立退し先某宅へ伴ひ行其上にて
 何れへもは立退し有べしと季しく語るよあ

士心も心おらず何かハ其殿の宅へ行並談を極
 増す不思議の結縁と云べし

是利太郎生質の瑞竹沢泉崎を依せしむる話

上野の国妙義山の林鹿は一人の奇士あり権化太
 郎と号す其民向人となれども天性活達大なる
 して慈仁を深し一を相達老若男女其徳風を慕
 ハずと云夏ふ其出生を尋るよ古河の大將成
 氏公而上校の補佐に因て威勢いミまき拵から
 妻腹の男子有りしが衆衆の譏よよつて追ませ
 られて爰に住居せり其後成氏公科ふま旨趣を
 申し召て嫡子の證として吉光の太刀はニツ引

輜の旗一流を給はり追つて村面有べき事なれ
 母子大に悦びけるが成人の後病身よりて世
 間たつ子あたはず妻を娶りて其母死して後妻
 懐胎しけるが孕める時也斗星を呑むと見下期
 月を經て去産おく十三月より一人の男子を
 出生すは時白老宅中より満て人々大きあや
 と太郎と名付て邑中是神仙の権化あらんと云
 て権化太郎と呼ぶは子三才より父没し母是
 を撫育種々と成長す幼より智量有て多くの
 子供皆其手下より従ふ作之或時幼児救くともる
 共み流川より出て釣おんど一て抱びたはふれ日
 既暮んとす太郎先より一んで一同より立る
 るは岨影の細道より年経る狼一疋をらばふて踏

をさへぎる其先を見送せハ或ハ一二匹をへだ
 ていくつともおく依居たり跡ある童共大に泣
 悲しき立歸りて隣邑より逃くんとする太郎ありと
 いて狼の側より立よりておのれ我々を喰はん
 とおらばかかおらば猶豫するるかからん思ふよ
 我を恐れて待居ると又へたり吾又汝を救すよ
 心おし路をひらきて通すべし澤添するるかか
 れと同道の童をのこらず側りの上より五匹一
 人狼よりあて立居たる勇威畜心より徹しけん
 先の狼跡を顧て一声吠て太郎が首を返して逃行
 ハ跡の狼是よまたかあて悉く逃散りける太郎
 少しも恐れず狼をやりたし童共を呼あらし
 先よりすくんで跡見送り悠々として立返りける

童共家よゆりて危難の趣太郎が所為を告げれ
 ば其父母大に驚き院んでのこらざる酒肴を取こ
 しらへて太郎が母の宅に至り恩を謝す母心中
 よ九人ふらざるを怪り慌ふといへども戒めて
 牙べて大膽の行をおさしむ十五歳及で
 内典外典は通し能書の巻あり駿馬を跨りて馬
 の足並を試み引を執てハ鳥獸を射る学はずし
 て引勢すぐれぬ鳥を射る百中弛る子ホ
 し一郡の者感得てまよと権臣のくふりと大
 勢友達の中竹沢平治泉崎主税と云者富家の子
 く分て太郎は隨身して美は君臣の礼の如し母
 も二人を憐みて太郎とひくく是を承す依て
 引馬鎧太刀の業俣猿の抱もけ西人ハ形は影の

後ふかごとと云或は太郎あ人と諸共は利根川
 殺生して一橋の人家に入て食ふをまのめあ
 人ハ所用有て跡よのたれ太郎一人船よふりて
 あ人を待合せいる内睡み及へり折から太田
 美濃守一橋橋より帰路の節は所を通りかたりし
 は馬足止りて進み得ず太田元来馬上の者秘
 術の手網を以てすむれ共身震して初す美濃
 守驚きて下馬して引立れハ常のどし惚れハ又
 跡をざりして進み得ず爰はちいて太田心付馬
 ハ未萌を知らず其黙ふりハ辺は神社有て不敬
 を咎むるあらんと静に下馬して四方を伺ふ
 社祠あし所の者を近付て歩み終は是まで馬止
 の證をすかずといふ太田いよく怪し暫く立と

しまり思案をめぐらしけるは側かたがらの恥はにかより陰々
 たる白髪の起るを足ては恥はにかみ故ゆゑあらんと立と
 まりて足るは二十文ばかりの若者わかしよ只一人ただひとり掉おとしを
 枕まくらとして臥居ふしり美濃守おどろきて是こゝ馬止うまど
 の主ぬしたらん備そとしもいか成なりゆのやらんと暫しばく
 行いきぎうかひひいるは竹沢泉崎立たけざいせんさき鳴り太郎を
 疑うせバ太郎目を疑うはる太田が方をまつと足あり
 綱つなを解とけて漕出こす太田の思おもはず横よこ手を打うて唐からの
 明王めいおうおこる時ハ斯かのどく瑞證ずいしやうあるをすけり
 如何いか様さまも奇異きいの曲者まがかあと人ひとを驚おどらして人
 家いえは寄よりて向むかしむるは妙美山めいびやまの麓ふもと権ごん化け太郎たろうと申まを
 者ものこと告つげけれは美濃守みのうしこれをこゝて先まに恥はにかみ系けい
 ある者ものもあらず天下てんか騷さわ乱らんの時ときか、る英雄いゆうお

こつて天下てんか一統いつとうの功いさをを顯あらさんか斗たられずと頻しば
 りは其生質そのなまのこのもしくは尋たづねばやとあも
 ひけれとも他人たにんの思おもはん所ところもいかいとさあら
 ぬ俵はたけまで馬うまは打うち相あ易やすをさして急いそぎ行いぬ

長尾為明 秋田天子照のる英士太郎子属話

或時あるとき太郎たろう沢泉崎たけざいせんさきと共ともは山やまは入いり獵かりをあす太
 郎たろう麻あを追おて山やま深く分わり終はる鹿かを足あらしあひ
 歸路かへりみちを足あすれて大おほき岩いわれ飯いひをひらきこれを
 食たべし岩いわは腰こし打うちかけ休やすむ折をり竹沢泉崎たけざいせんさき一人
 の士しと戦たたかひてあ人ひと太刀たち先まに乱みだれ追お立たれ次つぎがく
 退ひきまゐる其士そのしを足あるは面目めんもく秀麗しうれい美みかのどく
 みて太刀打たちうの透すきるあくあハやあ人ひと手ての下したは命いのち

を驚さんとす太郎大子驚きて大音上五人北る
 事亦かれ太郎爰はありと呼はつて二尺八寸の
 吉光の太刀を抜て電閃のどく馳よれば二人ハ
 ひらきて息をつぐ彼士得たりかしこーと太刀
 振かへして討てかゝり去ばらく我ふとえへけ
 るが飛走さつて一言いふ予あり理不慮有ま
 と太刀をからりと投出し大地はどふどふを組
 たり太郎も不審たれやらす太刀提げて倒し立
 より汝が太刀打尋常ならず中々我勝べきの徒
 ありず然るは我ひまゝ斯のどくのありさ
 まいかある故ぞや彼士詞をあらため某ハ秋田
 季照とP者く弓馬の術はまじし荒業太刀打も如
 斯子練磨せり先刻彼二人と不慮の口論も及び

爰よいたり是非なく切害せんと思ふ処も是下
 と立合ふ時子至りて白光眼も遮つて腕まびれ
 て働き心は任せず思ふは神人か且氏系正しき
 人よあらずやと疑惑生じて斯のどく性名つ
 ます語り其上は我一命は牙の心は任せんと
 思ひ切りたる有様おれは太郎も匿まつ、まれ
 ず我にそ是利成氏嫡孫是利太郎と云者く汝
 誠子吾家よ心あらば今日より我は從て我心を
 も助よかゝと念比る云叶れば八郎大子悦て幸
 時天下大は舌れて我ひ止むるよし京都將軍権
 威臣下は奮はれ古河の晴氏公並余氏康は制せ
 られ中興の期知るべからず何とぞ是利家の氏
 族民間は飄流して大器の人あらば支るがふて

大業を立べしと八方周遊して是を求むる期せ
 ずして君は逢ひ奉るる誠は天道の是賜は上
 あしと始て君臣の約を成し竹沢泉崎も面
 ては日よ人も始て太郎が系印を穿てハ八郎は
 ついて君臣の約を成せり是より太郎が家
 ハ郎を伴ひて母も有る家子會ふらず三臣と伴
 家おれは時くの貢有て家子會ふらず三臣と伴
 ひて日夜近村の周遊して業を誡めては
 志す折か同國平井の城を相撲の行あり
 て近村の諸人馬集る下知を信ふ其は者重く
 制し物頭ハ具足して下知を信ふ其は者重く
 四人觀場に入れハ高く様を信ふ其は者重く
 輔憲政見物心諸士恭敬して誠は將軍の伎亦も

け上あしと又へたり太郎聡と是をえて彼川越
 の夜合戦は大敗して天下は指差せらる、猶未
 悟らず驕り慕て斯のどく匹夫の姿とあり彼後臣
 臣下あり吾ハ斯のどく匹夫の姿とあり彼後臣
 ありといへども南猛威あり天下それいかにぞ
 やと憤りの心頻りして思はず居文高はあれハ
 雑卒声くみ声あるぞ其若士尾籠ありと棒
 を以て是を打て共革らずハ郎腹を穿てかぬて
 くすは故原主人の頭上は棒を穿てかぬて
 伏く立上らんとするを太郎急は押しめて我
 刃を縮め神色自若として終時心よく見物して
 之歸る時は雑卒共ハ郎を指さして先刻●あの
 色男こそ吾々が制する時は雑言を吐けるが今

一人の士のよくも止めけるやへも隠便もやご
 せしほ威光を以て制するものよ向て敵をせん
 とするハ威子命をらすと嘲るよ秋田今ハこら
 へかねて忍か、つてあくを投出し嘲りし者を
 引捕へ小鬼の如く押さくめてすでまかうよと
 へまよける所を始二人立か、つて引のけ太郎
 扇をもつて八郎を散ぐよ打擲して役人よ詫言
 して無理よ其場を立去り遥なる宿をづれの酒
 店よ寄りて八郎よあかひ人野心を抱し者ハ小恥
 を厭はず我憲政をえるさへ野心の思をあす況
 や雑人原まをうごめく虫の如し彼がたぐひ
 と争ひて身をうしなひて徒よ光相者の名を取
 て大義の企ていづれのえを以て成就せん古く

も万徳一忍よあかすといへり向後懐んで必血
 気の勇よたやる事なかれと
 魁あれハ八郎理よ依して律よ一止の怒よ絶す
 君もしるをまらめ玉かはずんハ必又命を失ハん
 恥入よ絶たりと涙を流して心服すれば竹沢泉
 崎も共み感涙を流しナリ時よ一間の内あり声
 を上け上州山の本鹿権佐太郎あり見集仕ら
 んと紙門を押ひらき出る士あり
 巴威儀とふくとして律よ五人よ勝れたる人
 あり静み太郎よ打むかひ某ハ越後の玉の長
 尾盛物為明と下者ハ知少より下野の国荒山よ
 とありて軍略の道よなし何とぞ名將は役て大
 馬の力を尽し天下を一交匡さんと思へ共南時

の諸候言ふ天下を得る器は非ず我日本性
 武を尊び義はいさむ風俗はれは氏正しく有徳
 の人を尋ぬるは其人あし今日相模の場よふと
 君の形相を見るは其器万人は越たり側ある人
 よとへ心権化太郎と号するより心せまり器
 を待先刻難卒争て棒を以て君を撃んとすは
 尺にして其棒はあたらずまゝの英士既よ
 詞を發してかゝるをあたるとめて神色はこし
 もあせず猶更只今英士への教訓はもと古往名
 將の器あらはれたり其上君の前悔常は白虎有
 て是を守る人の眼みえへざる所ありて英雄
 賤気の術は達する者みあらざればこれを足る

りあまたハズ君カ一氏系にしくんは某今日君臣
 の約をあして天下の謀を定むべと口弁
 流るが英名我既はす知れり折あらば尋ね行はた
 すらよ頼まんと思ひしは時いたつての約面見
 よたへず何をか包まん我こそ是利成氏の美孫
 長尾の謙吉忠の太刀譲りの越一々よ語り玉
 長尾志まつて頭を地につけ美み氏と云器量と
 云天のゆるせる名君あり身不肖ありといはと
 も為明神出思没の謀を以て必天下を言はし
 と頼母くや上列益を給はつて君臣の契約を
 おし懐中より一軸を取出して是をひらくはハ

州の國國細密よりて國郡目下子たる天下を定
 めんとするは美濃の利害を知るはあり先統
 州を賣動して是を根本とせんる専要の早天下
 並旗を上るは海道は去くるし然れども諸候
 並立て一所の領地なくんは軍創のあするある
 ハす東國ハる情疎にして一領地を得るは早し
 是南時の権道あり思ふは上枚の運已は傾き
 康啓天の勢を以て関龍を看久しからず武
 憲政をそすべし然れ共並は景虎あり西南子武
 田晴信あり氏康全く東玉を平治するあたハ
 ず三雄争ふ時吾切を立るの時然く安房の里
 見一黨の助力を以て後詰をむむ並條既も勢衰
 へば潰れはて五國は切入人情を懐けさ陸

へ手を伸て根本を堅くし越後子様し合して義
 兵を偸へハ景虎元より義勇のあり必忍諾せ
 ん是子流て大將を奪ふて君を嗣とあし氏康と
 手切して京踏を景虎の手は伸させ東辺を切靡
 て海道より押上らハ大功必立べしと一紙圖面
 の上よりて後末を慮する神の如し太郎大は感
 心あり吾長尾を得たるハ龍虎風雲の時至れりと
 躍り上つて觀喜をなす秋田始三人の者共も其
 知量は心指を長尾重てりけるハ時未至らず口
 人子知らせざるこそ要あり其内出は英士を
 試みて多く美濃を結びるを永く謀るべし臣今
 日君は別れ下野へ歸り善信を以てるを偸へ時
 又合まざるべしと細子語りければ太郎一々

届け玉ひこれより引かれられて家もゆりける三
星又爰は佳平会す不思儀ありける次第あり

日本水滸傳卷之十一

一色太郎丸流門弱死書女貞烈の話

鴻の巣一戦勝利有しより義連の武名を國よ
たあ結んで武勇の諸將和蘭して密に使を馳て好
に多賀谷下総守勝軍の創業に用べし勢あり
是に請常州へ謝使として一色太郎丸流門弱死
を請常州へ謝使として一色太郎丸流門弱死
時範の武勇性力を是を感し誠ま古金の
種々の武勇性力を是を感し誠ま古金の
勇士あり先達して勝負の時ハ鋒先を免れ
正に軍神の加護ありと大に悦びて他事なく馳

走有ければ一色も十分威を示し路に及ぶ
時多岐谷念比子これを送りて厚く賜有ければ
一色恩を謝して路を急ぐ折前霖雨よて利根
川以の外に洪水して渡りしとまらんとて
一色岸に付て舟を俵す頃舟頭ども風波の危を
説て去かず一五日を待て水を落せばしと云
急なる一色少くも下知して船を出さ
せし舟頭が少く人を撰りて押出せば一色少
らりと乗移り即尋十人斗同船よて乗出す川幅
幸里に余り水の早きと矢を射るど一時範はこ
も恐れぬ船をさすよよ少て眺まは時味因主
膳が郎尋宮を赤門と云者船頭よ交り居て透波
を勤めけるが主人先年の戦よは一色か為す討

れ一恨骨髄に徹し何ぞぞ健言をむくハんと欲
これ共方夫不孝の一色尋常の勝負思ひもよら
どとかねて流星砲を貯け持つは流星砲といふ
ハ八寸尤かりの竹筒に毒砂をこめ並物よて
一振打てハ毒煙を吐せんでいかちる猛き者も
目を下し敬死の鳴呼余哉一色何心なく船に立たる
を宮を赤門思ひかけす流壘砲を敷糸とひく
煙のどき轟砂送り一色が目鼻もこかず降か
るを急たりやおふと三間櫂を取ふを諸膝か
いで水中へ打落すやいおや宮を赤門氷のどき
小剣を抜もちついで同く死入たり島尋共
大よ警共よ水中に死入らんとする所を船頭
ども是を制するを後を立て七八人の船頭を悉

くり切殺し水中をえりよ一色猛一といへ共水練
 子達せず竟に水中に死して二人の死骸浮舟
 たりたり即尋急ぎ船中へ引上げ是を見るに宮元
 赤門が肩骨を握りたる所骨くだけて死してい
 まだ放さず種々子いたれども其甲斐あけれ
 バむおしく死骸を擔ひて新館に立ぬり右の次
 一色ハ吾ハ牙あり何ぞ苦を早く捨てけるぞと
 悔惜玉ふも是非あけれ長尾を始め城戸秋
 田愁傷子堪へて一色が妻をめて其死骸を改
 めて少も歎かば諸人は是を思けるが自分下
 知して熊谷寺に葬し其死骸を焼く火熾んある
 時子懐劍を肌よつき立て火熾の中子忍入て竟

子むおしく成ぬ時範生年三十七歳あり妻女
 廿六歳け夫有ては妻あり一色弟を結びてよ
 千軍万馬の間子粉骨を塵一功また半に至ら
 ずして非命に死すあ、天あり誰をか恨くや

足利義連長尾以下没命の証

今年弘治二年いかなる年そや去年小楠半七郎
 没し今年一色太助丸赤門亦死ありければ
 連二人の死別を悲みて食減ト形容憔悴して五
 月の末より寒熱共み発し病大に危急及びけ
 れバ奥方を始めとて長尾城戸秋田側を離れそ
 めの子と思ひながら心をなごして側を離れそ
 が次子に精神嘉へ玉へバ入替り病を助け

食を進め殿西を撰り薬を用るといへども一糸と
 其験あし冬ふ至て万病のいとま長尾城戸秋田
 其外皆塚中沢白崎等を召あつめ吾不肖ありと
 いへども是利の庶流よして乱を制し天下太
 平の業を立んと欲するも各我を補はて千辛万
 苦して大功漸く其基をたし是全く我武徳は非ず
 長尾が智謀衆も秀で諸英の勇武郡はすべし
 子よれり我今疾よか物て全愈せざるを
 知れり我死せば近邑皆肖かん運命の傾く所智
 も用る所ふし勇も施す所ふしといへども各猶
 志を堅くして龍丸を補佐してせめて一城を安
 ドて後表の謀をたしくれよと氣息忍んくとい
 て宣ふは長尾を始皆低頭して涙よむせびいた

リーが為明やしくけりいさる魚を煩はし玉ふ
 とを補佐ふして大功を顯さん事何ぞうたかふ所
 ありん君の病悩甚しといへども未だ年よして
 精神未減せず能保養ふさば何の事復あま事か
 あらんとりけるも送連も気が心よくて諸士と
 暫く軍中の諸務を語り皆々次へ立けれも送連
 一人灯の下に玉ひりか忽ち立けれも一色小
 楯が常のどく側もあり送連大に悦び玉ひ我既
 子あく泉下の人ふりとせしまいかいてか
 く常は復しけると尋ね玉へ二人平伏して君
 子先達て死を安くと大業の一臂を欠く事業等
 が慎のふまよれり然るも君臣等を推す永く

君臣の圃を共みせんとす是よよつて遠く来れ
 りと終りて其形あし美連芝へぞ声をあげて
 小橋一色と呼び玉へば長尾城戸秋田大子怪
 てけまり様子を問ふ美連始てさとり右の奇
 事を語り我命旦夕あり汝等後事を全ふせよ
 と病を語り我命旦夕あり汝等後事を全ふせよ
 合て潜歩として力を失ひ夫より側を離れぬ精
 力を尽すといへども日を追て病重りて十二月
 十三日忽ちとして逝去有けれは奥方始三臣親
 兵送骸すかかつて離る事あたは生年廿八
 歳あり大小上下とも闇夜に灯の消たる如く悲
 衰の声教里よ及ふ斯て果ざる事なれば長尾城
 知しで送骸を納め諸方の固を以てし秋田城戸

を招きて命数限有て主君よ別れ骨肉裂るがど
 し痛悲たれか遠ふべきを任せ共其既死の逆
 きを知る万一某死亡せば奥方若君を伴ひて雑
 兵廿五騎を従へ城戸持廣中房の国へ送り里見
 親弘を頼みて世の中を謀り給へ我己は里見よ
 親ももて其の情を通りけり秋田ハ残兵を
 以て館を守り若君往居のどくまいて城戸の落
 着を届けて館を焼捨て房州べいたりともし
 若君を補佐せられ生れ死するべからず故はけ
 旨を達するのミと語りければ五人領掌し心の
 内は怪しむが其夜よ及んで為明礼服を着去端
 臣水魚の交といへども生て道を同うし死て時

を遠へて是又一奇るありいとたつて勇威逞く
 天晴寛仁大なるを衆人を表す一勇威逞く
 て万人人心伏せ古今無双の名將誰か上に出べ
 き惜哉為明博識多智文武を兼奇斗神を走
 武勇群は秀づ古の智將と称する人誰か抗せん
 や天は賢君臣を降して却て是を早世人事の
 斗る処は非ぢ城戸秋田荒れとして神志乱れて
 麻のぞくふれ共忠誠何ぞたにまなく君臣棄送か
 たのぞくいとある一家中も離散をり泣く
 後妻を約して逃去る者多しといへども賢硬
 の手士二百人死を決りて残りければ時を移さ
 ず房州へ趣くの手段をたせり初七日よあつて
 沢平次泉崎主税多連の墓所にて自殺して殉死

をあす二人幼年より多連は後ひて忠義他は異
 ありと謂つてし多士ありとかゝる所は奥方坂
 戸が妻自殺あり遺書に城戸秋田は給ふ先君運
 拙ふして二士幼君を補佐す我生て幼君と共に
 ありは緩急心よ任せざる事あらんとさつし先
 君と偕老の約をたかへて生害を遂るよあり
 城戸が妻死して夫を勵ます妻あり是并流矢の
 奇談よして女子よして大丈夫あり賢貞賞する
 余りあり

小張落城鹿嶋悪次郎防戦討死の話を

義連折去あつて近邑自分離叛せり小張城中
 て鹿嶋悪次郎多連の病氣を定めて心頭常に愁ひ

て其消息を待し急便有て其変を信へければ
 悲恨胸ふふさげり一声叫んで地は倒るを家人
 助け起して漸よして人心地付ては城保つべか
 らずと決して城中の士卒は主君の赴去を告て
 皆离散せむ集り勢多く逃去て弟黨三十六人
 決然と居れ鹿嶋大に賞嘆して一行末
 先城を窺ひて残り居れ鹿嶋大に賞嘆して一行末
 を謀らん支度せし小張を岐守変ふを信へ
 きて今ハ誰をか恐んと四百餘騎を従て急よ
 起て攻詰たり鹿嶋少もあどろかぞ三十人の
 者を下知して防矢敷く射させ寄手の人救ひ
 るむ所を三十余人を従て本戸を窺ひて切て
 出るたハ鹿嶋こそ出たれと一同は崩れかゝる

を得たりと鹿嶋先進んで今日を最期と思
 ひければ精神一億かつて打太刀先稲妻のどく
 暫時のうぢよ死人の山を築よけるま岐守下知
 をあして突竟の射手をそろへ四方は別れて射
 立たり三十六人の兵共一騎も残らず思ひくよ
 討死して今ハ鹿嶋一人退く心少くもあくハ
 方ハ切て廻り火水も成てたかひが身も立
 矢数を知らぬ終は八方より射すくめられ太刀
 をつかささま突き眼を閉ひて死して地は倒れ
 老仁玉立よ立たりけりまばらくハあそれ
 者ふかりが時刻うつれは初て其討死を悟り
 死首を争ひてふたび城を取返せり暫時の勝
 員も岐守が手勢百十余人討死ふた鹿嶋生年

三十二家急や御劍術万人は勝れ小楯と一奴の
 美玉のどし其武勇業術の達したるのみならず
 忠義の心金石のどく無双の英士ありけるか運
 命拙うして一戦の上は年を落せ人足をと
 まらずといふ事あり

足利龍九城戸持廣水雑笹塚以下死亡の話を

去程一城戸次高太郎持廣秋田と談じ翌年二月
 龍九殿を補佐して雑兵九五人召連て密に新館
 を立出て陸路を馳せ人知るるあらんと利根
 川より舟を下し房州に入りて下りけるが船既
 海上に押出して波平かき下りて教里漕行しが
 中にて俄に風落雲起りて海上に觀夜のどく高
 大

よ漲りて舟漸くも居らず今既破舟の作られ
 城戸大に驚ひて船頭を討て問ひけるよ船頭
 りけるハ一艘の小舟をのちぎ来れり既一
 人乗玉ハ其奇力をつくりて助くべし大船を
 全ふする事あたはざる所なりといふは雑兵共
 悦て幼君を城戸に抱かせ急よ小舟へ移しつ
 残らぬいさかも恐るゝかたちおし船頭力を
 尽して乗出すよ小舟波に乗てつかるべき様子
 あければ船にて皆々悦びのける天運の尽る
 所いかんともおすべからぬ一轉の風側より起
 て幼君の小舟を逆様み吹返せば船頭残らぬ
 浪を引れて城戸一人片手幼君を差上げて片手
 よ小舟を起さんと云れと風つよく波あらく船

ハ次子遠ざかるニホたの船にて同音あり
 いくと取さしげど其船近寄る手般もあし城戸
 ハ天命のある所ありと力を尽してふくなく船
 を引起して乗上らんとせし所も又もや海風落
 か、つて船を吹立てたへの巖石にあたりて
 崩れ失ければ城戸ハ精つかれ果て
 既し海水に溺れけれども猶幼君を差上りて暫
 くハ幼君の形えへけるが一國の大浪に主従の
 形打込れて跡方もなく成行ハ雑兵同音し声
 江て大子歎き暫塚熊太島先子後かき切て海
 底へ死にぬば續いて廿四人の者共差ちかへく
 一人も残らぬ死失ける龍九僅に六峯城戸次郎
 太郎持廣廿九峯城戸義連子従ひより殊更の

龍臣よて形影のどく付添ひ孤地を請て其
 おす事あたはず精誠日を貫く忠徒等海中に恨
 ミを残す賞するよまへたるハ鳥家かり始不
 の業に立けるが義佐として志を起し義連子後
 ひて忠心をこもたハまず武勇戦功龍虎の五
 臣に亞ぐの功遂に其功亦く一旦に死す可
 惜

新館灰燼秋田季照夫婦義死の話

遠山丸門佐ハ義連の死去を聞いてこの弊に乗
 て新館を乗取去年の恨をたらしめんと密に人
 数を手合して都合千人追々道をかへ鴻巣に
 いたつて一手とふり急に進んで館を取まきと

きたをどつと上たりけり秋田八郎季照かねて光
 悟の事おれは少しも遅疑せず弓一通り射出
 とひとく一番に乗出して寄手の中へ一文字
 に乗込る後左右にわけ立れば一陣追崩され二
 陣と意入かハハ秋由馬足を休めつ又も人
 教をまとめつ戦ひてか、れバ遠山自身も馬
 合て秋田と暫く戦ひて叶はずして逃げてゆく秋
 田去まり追討れバ遠山又踏とまり戦を不
 しけれ共路を急ぎて逃出るを秋田勢は果て追
 けるは左右草深小路をて左右より伏兵おこ
 り熊手を以て人馬共引倒せば流石の八郎馬倒
 れて其身もとふど落起上らんとせし所を橋重
 り何ふく繩をかけたりにける遠山大子も悦

館の四方を取巻いて火を懸ければ秋田が
 ひぐまよらふて長刀をさげ大勢の中へ欠入
 七八人土倒すれ共多勢の人教手取足取打た
 をして是も同く生捕たり百余人の身當一人
 も退散せず枕を並べて討死せり館ハ一村の煙
 成て其跡かたも又へぞ成よける籠塚新館を
 営みてより僅に七年よして焼亡遠山いささ悦
 びて我城へたちゆり夫婦を引出し顔面を
 容貌憂美よして恰も神佛のどし遠山懇に
 して北条氏康子後んをすむれ共秋田眼を
 怒らして足利多連の家風大小上下婦共死
 して多有るを知る生て不多をさす事を知らぬ
 と其後答ふる詞おし日有て龍丸城戸入水の沙

汰をすより夫婦食事をとつめいか子種むれと
 食せど眼を眠り安座して断食す二日を経て夫
 婦同時息絶たり季照廿九年あり爰に於て七
 聖威化の君臣悉く早世しぬ天てうあやまたず
 は豪傑を下し英名天下に傳ふるまでよし
 れぬ年数載の百子して諸家土民暫くハ秋嘆ふ
 すといへども東多事より興亡日々新た
 一て兵火よ記禄禁云し既子天正に至りて是を
 知る者又稀ふり後世其英名不測の信義湮滅せ
 る事惜で道人多し傳を著す諸豪傑の
 僅に記神事の多し口傳を著す諸豪傑の
 思存する事多し城戸持廣入水の子と論し

010190525460

